

サウジリアルと国際通貨体制

サウジリアルは世界の通貨の中でも為替変動とは最も無縁な通貨の一つだ。ドルリアル現在3.75を中心にほとんど変動はない。この10年間を見ても世界金融危機直後にドルの下落により、一時的に3.70に近づいたことはあったが、すぐに安定を取り戻した。

サウジリアルは対ドルで固定相場制を採っている。それに資本取引の規制もあるので通貨は安定を保っている。井の中の蛙状態なのだ。従来サウジアラビアの収入のほとんどは原油の輸出代金、しかもドル建てだ。ドル資金は豊富で外国からの借り入れも必要がなかった。輸出代金の一部を固定したレートで現地通貨に変える安定したシステムを維持する好条件が整っていた。

だがこうした時代が過ぎ去ろうとしている。原油価格の下落で外貨収入が減る一方で、社会インフラの整備や膨張した公務員などの人件費でコストがかさみ、もはや社会的費用は何でもタダという時代は終わった。

社会の構造改革を進めて原油依存からの脱却や人件費の削減、外国からの借り入れや投資の促進も進めなくてはならない。政治経済の課題が一举に噴出した感がある。実は原油依存体制からの脱却は以前から目標に掲げられていた。新しい産業の育成などが叫ばれた。

だがそうした試みが十分実を結ぶ前に原油価格の大幅な下落が到来してしまった。そこで大胆な構造改革が必要になった。30代前半のサルマン皇太子がその任を負うことになった。

皇太子は社会経済の構造改革の実行に取り掛かるだけでなく、イエメンに派兵し、イランとの対決姿勢を強め、米国から大量の兵器の購入を約束した。他の同盟国とともに湾岸協力会議(GCC)のメンバーだったカタールを封鎖した。ユーロが誕生したころは湾岸6か国の共通通貨を目指した仲間だ。

対外的緊張が深まる中で国内でも汚職摘発を始め、仲間の王族の逮捕や資産凍結を決め、緊張は一举に高まった。

一方で米国に代わって世界最大の原油輸入国にのし上がった中国は原油輸入取引のルールを変えることを目指す。ドル建てから人民元建てにだ。サウジアラビアが人民元建てにすれば他の中東の原油輸出国も追随する可能性が出てくる。原油のドル建ては決済通貨としてのドルの地位を支えるものであり、ドル基軸体制の根幹の一つと断言している。

サウジアラビアを巡る環境の変化は、安定したサウジリアルの通貨制度を根本から揺るがす可能性がある。それはドル基軸通貨体制の揺らぎに繋がる可能性を秘める。

次回の更新は11月22日になります。